

人形刷毛

十一代垂仁天皇（約二千年前）の二十八年冬十月、弟倭産命が死なれた時、近習の者を悉く陵の周囲に生き埋したため日を経るも死なず数日間泣き叫び呻吟し苦しみの絶叫がつづいたので、天皇はこれを悲傷憐れに思い近習のものの生き埋を止めさせられ、三十二年秋七月皇后日葉酢媛が亡くなられた時、野見宿称が出雲国の工師部に埴土で人馬の形をつくらせ献じた、その後は殉死を止め人馬の代りに埴輪が御陵の周囲に埋められたことは日本書記につたへられている。

我が国で人形が作られた源は埴輪であるといわれており古墳の周囲から発掘される埴輪には宗教的な重大使命があつたのであり、今日の玩具人形や美術工芸人形も初めは宗教的な意味をもつておつたもので、今日にいたつても各種の守護神も多くは人形であり、収穫に関する祈願、災厄除や祭礼など宗教としての重大な役割を果している。

最初粗末な材料によつて作られた人形は文化の進展につれて進歩し古くは土偶や藁人形であつたものが、今日一般に愛玩鑑賞される人形へと発達したのでその巧緻な技法は能面の影響を多分にうけているといわれる。面も歴史は古く（面）によればその渡来は飛鳥時代といわれ

伎	舞	行	追	能
楽	楽	道	難	
面	面	面	面	面

狂言面

などと時代を追つて娯楽、宗教に用いられたのであるといわれるが足利義満將軍の保護を受けて完成したという能楽面が仮面としてそれまでに見られなかつた完成を遂げたといわれている。

(日本の人形) によれば鎌倉末期以後仏像彫刻の順次衰退に伴つて仏師達は需要性の多い人形製作へと移職し、嵯峨人形はその現れの代表である。

と伝えておりその種類も

嵯峨人形

奈良人形

茶の木人形

衣裳人形

機巧くわく人形

御所人形

加茂人形

張子人形

雛人形

伏見人形

芥子人形

現代人形

などをあげているが博田人形とか三春人形や鳴子こけしなど信仰や伝説に因んだ素朴で巧まぬ技法による地方色豊かな民芸品の郷土人形も種類は多く、国内全土にわたつて製作されている。

その名称も王朝時代の埴輪^{はなわ}にはじまり平安時代の人形^{ひとがた}、形代^{かたちろ}、あまかつ、ひいな、ひとのかた、御霊^{くもひとたま}、偶人、土偶人、木偶人、人像、艾人、傀儡、となり人形^{にんぎよう}の文字をつかい始めたのは室町時代からといわれている。

奈良人形は絵具の彩色をほどこし、はなはだ趣味の豊かなもので、そのおこりはつまびらかでないが、春日若宮の祭典にもちいるところの鳥台および田楽法師のもちいる笛の笠の簀に、尉、姥、三大臣、狸々などを彫んだのがはじまりであるという。

徳川時代に奈良の絵師岡野保伯（寛永五年八月十日没）がその人形を改良して人物などを彫刻し大いにもてはやされるようになったといわれている。

嵯峨人形は慶長のころ、角倉了以が桂川と大堰川の改修という大事業を完成したあとに、嵯峨の地に隠棲して手すさびにはじめたものといわれ、寛永から享保のころにかけて流行したものといわれている。

木目込人形^{きめこにぎんぎよう}は元文四年京都加茂神社の雑掌をしていた高橋忠重が、加茂川堤の柳を使用して神事の柳宮の残片や、その木の根の黄楊木に似た木の味、木地のうつくしさを利用して人形を彫り、それに神官用の衣裳裂れの古いものや、その切断片を利用して、あれこれ色をとりあわせ人形に相応した裂地を顔面手足以外にへらの先で木目込んで楽しむにつくつたのがはじまりである。

宇治人形は天保十四年宇治の茶師上林樂只軒^{ちうひけん}が奈良人形にならつて古木の茶の枯木をもつて茶摘女の根付人形

を彫刻したのにはじまる。

こけし人形の歴史はすこぶる古く、伝説によると、文武天皇の第一皇子（こ）惟喬親王は即位を御弟惟仁親王（清和天皇）にゆずり自分は鈴鹿山脈の両側の小椋村に隠棲し、多くの工人を集めて、木をまるく挽いて碗や盆をつくることを発明された。この工人を木地師とかあるいは宮中の御器をつくつたので御器師ともよばれ苗字帯刀をゆるされていたという。

この木地師は材料の木をもとめて全国に散つたが、なかでも資材の豊富な東北地方におもむいて山奥に安住するものが多かった。そして附近の子供のためロクロで簡単な人形をつくつてやつたのがこけしのはじまりだといわれている。初期のこけしには顔がかいてなく、子供がそれに自分で目鼻をかき、胴に着物をきせて愛玩し、今のように絵具で彩色するようになったのは明治時代の中頃過ぎからである。

こけしは素朴で稚拙なところに真の魅力があり、一本買うとまた一本ほしくなり、とどまるところを知らないマニア性を発揮させる。けつして男性の象徴であつて女性の孤閨をなぐさめるお相手だといわれているばかりではない。其の本場は宮城県刈田郡宮村遠刈田をはじめ鳴子、白石とともに三大分布地となつている。

伎楽面や無楽面等は仏師が作つておつたものが能面になつて初めて面打と呼ぶ特殊な作者を生じたところがあるがこの能面師が人形師に転職しその為、頭の作法が発達し、顔の部分だけを専門に作る頭師が現われ、江戸初期には、人形の呼称が使用され、日本人形独特の肌色表現の塗料として胡粉ぬりが完成した。胡粉塗りに用いる人形刷毛は、この時代、即ち江戸時代初期から使われたものと考えられる。かの有名な文楽人形も寛政年間淡路飯屋の人植村文楽軒という素人義太夫語りが大阪へ出て、高津新地の操（あやつり）の定席を設けたのに始まるとあ

る。

操り人形浄瑠璃芝居は江戸時代のはじめ、浄瑠璃姫物語という義経のことをかいた物語りを琵琶法師が、かたつていたが、この伴奏に三味線を用い、物語りの様子を当時子供相手に見せて生活していた傀儡子^{かいらいし}という、小さな人形を首から前につるした箱の上であやつて商売にしていた大道芸人と結んで演じた見世物であつた。

したがつて今の文楽人形のようなものではなく、小さな一人つかいのものであつたのを宝暦の頃発達して三人使いになつたものとの事であり、この文楽人形の製作も刷毛で胡粉を塗つて磨き上げたものである。

わが国の古典芸術として四百年余の伝統をまもり続けている「淡路人形浄瑠璃」の発祥の地は淡路島の三条部落であるという。百太夫という人の考へ出した人形芝居でその正統をついだのが引田源之丞で、元龜元年二月、宮中によびだされて、四位下淡路掾^{あじのりけん}という位をあたらえられ、さらに豊臣秀吉が朝鮮征伐の軍をおこした時、遠征軍の士気をたかめるため、源之丞を召して京都の四条かわらで興行させた、源之丞一座は阿波にうつり、阿波の人形浄瑠璃として発展したが、淡路仮屋の人、植村文楽軒が寛政年間大阪道頓堀高津橋西詰附近で操り人形芝居を興業し、文化八年から天保十三年までこの操り芝居は博労町稻荷境内で行われた。この間養子大蔵が後をついで文楽の流行と復興のために努力し他の人形座を庄倒して文楽座の隆盛をもたしたので、文^ぶ座と名のつたのは明治五年、松島に移つてからであつて、明治十七年大阪船場に帰り、小屋を新築し地の利を得て再び興行を続けたものという。

また人形芝居には新潟県佐度相川町に文弥人形芝居がある。創始者は岡本文弥で約二百八十年前の延宝年間から続いた伝統を保ち、現在無形文化財に指定されている。

三月三日女子の節句に飾る人形は古くは「ひひな」或は「ひいな」と呼ばれたもので、源氏物語では「ひひなあそび」とよばれている。この人形の起源は子供の人形遊びとしてのひひな遊びと、支那から来た上己の祓い用の形代かたしろとの混同から生れたものといわれている。

形代かたしろは人形（ひとがた）に切つた紙に姓名年令を書いたもので、これを水に流してけがれをはらい、また病いや災厄をのがれる意もある。

この形代のみそぎは今もなほ神社で行われているが、京都上賀茂神社のみそぎは古歌によつて特に知られている、

風そよぐならの小川の夕ぐれは

みそぎぞ夏のしるしなりける

この歌は小倉百人一首にもある名歌で藤原家隆の作、この歌は上賀茂神社の水無月祓を詠んだもので、六月三十日宵やみこめた橋殿（はしどの）にぼんぼりがとまり、みやびやかな管弦の音がひびき夏越祓（なごしのはらえ）がはじまる。

檐（なら）の小川は橋殿の下をくぐつて、せせらぎ、人形とともに流れて行く、夕風そよぐならの小川は涼しく秋のように思われるが、みそぎをしているのは夏のしるしであるという、この歌は寛喜二年の作なので七百三十年前の昔の歌であるがこの行事はいまも変りなく行われている。

雛人形は平安期の頃にその端を発し、順次時代と共に進化して徳川時代の世の泰平に並行して雛遊びから雛祭りに移行し上己の節句と呼び、三月三日とその日を定めたのは寛永七年以後と云はれ、この頃から今日内裏様と



御所人形鶴亀の帝王の頭



唐
児



親王雛（女）



親王雛（男）

呼ぶ雛人形即ち坐雛が完成された。今寛永雛と称し享保雛と呼ぶ優美華麗の人形は、皆その年号を冠して呼名としたもので、以後雛祭りの隆盛につれて考案創作されたものは実に幾百種に及んでいると（日本の人形）が伝えられている。

五月人形については端午の節句の由来として菖蒲の節句、菖蒲の節会、初節句ともいい、ふるく中国で行われていたもので、その中国の風習がわが国につたわつたもので、その歴史は古く佳節として祝した記録では日本書記に仁徳天皇三十九年五月に詔して菖蒲を献上せしめられたとあるのははじまりであるといい、あるいは推古天皇の御宇よりはじまるという。しかし一時廃せられたものとみえ、聖武天皇の天平十五年五月あやめかつらの再興とともに菖蒲を献ずることも復活されたところある。

この日に菖蒲をもちいられるのは葉草で邪氣を避け、悪魔をはらうと同時に火災をのぞくという信仰にもとづき、平安朝の中ごろより虫蛇の諸毒を避けるために節句に蓬よもぎとともに軒に葺かれあるいは湯に入れ、酒に浸して飲んだもので、ついで武家時代となつては菖蒲と尚武と音が相通ずるためによるこばれ、公武とともに年中行事の一つとして、五節句にかぞえられるようになり、三月三日の女兒の雛祭に對して男の節句となつたとある。五節句の起源としては

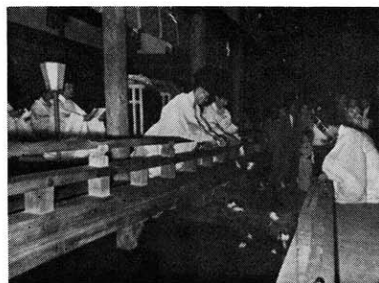
七種の節句	正月七日	七種粥 ななくさかゆ
上巳の節句	三月三日	桃花餅
端午の節句	五月五日	五色粽 ちまき
七夕の節句	七月七日	索 そう めん めん 麵



右から川俣こけし、土湯こけし
弥次郎こけし、弥次郎こけし



右、木地山こけし
左、鳴子こけし



上賀茂神社 夏越の祓



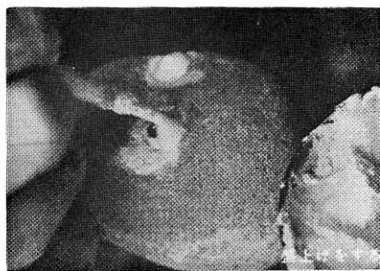
木目込み人形



人形師



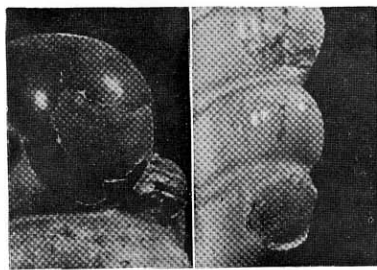
胡 粉 塗



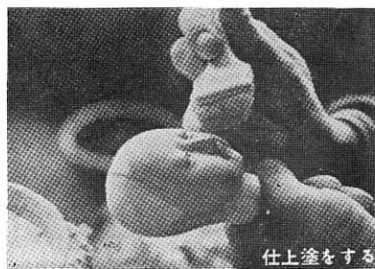
盛 上 げ



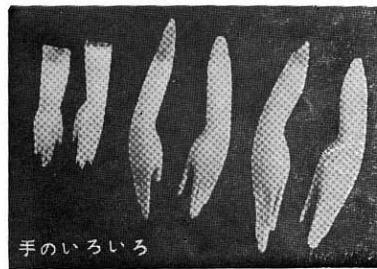
眉をかき面相をしあげる



胡粉塗と木彫下地、胡粉塗上げの厚さを示す

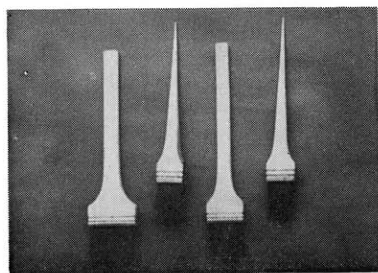


仕 上 塗

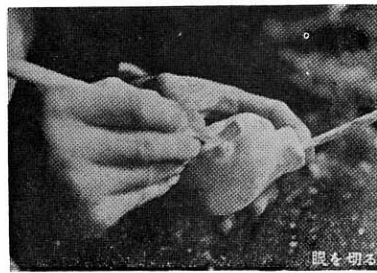


手のいろいろ

手のいろいろ



人 形 刷 毛



眼 を 切 る

重陽の節句 九月九日 初亥餅

であつて寛平二年、五十九代宇田天皇の時代に行われたといわれている。

なほ伝説によると光仁天皇の天応元年に蒙古が来襲したとき皇子早良親王が征討の命を奉じ山城国紀伊深草村の藤森神社に詣でて出陣されたが、この日が五月五日、たちまち神風が吹いて敵船をくつがえし戦わずして勝利をえたので、その際に甲冑弓箭その他の兵器をかざつて祝つたのがはじまりであるといい、幟については神功皇后が征韓凱旋と応神天皇の出産を祝して旗を立てさせたによるとの説がある。

明治六年正月にこれを公の儀式としておこなわれることは廃せられたが民間にあつては鯉幟を立て、徳川時代から始まつたという武者人形をかざり、柏餅をつくつて祝う事は今も盛んに行われている。

徳川時代に人形をつかつて人を呪う丑の刻参りという事が行われたとの説話はいくつもあるが、もつと古くからかような呪咀があつたといわれる。桓武天皇が延暦三年に遷都した平城宮跡の内裏の北裏側、大膳だいぜん職という役所があつた跡と推定された一廓から当時使用していた井戸跡が堀り出され、この古井戸の中から土器の破片と古銭にまじつて木製の人形が出てきた。この木製の人形は長さ十五センチ、幅二五センチ、足は二本に切りこみを入れてあるというごく単純な人形であるが、両眼と心臓に当る部分に長さ五ミリほどの木釘を打ちこみ、胴の部分に何か書いてあり判読できないが、人形には口ヒゲがえがいてある。男性のようである、複雑を極めた奈良時代の政治の裏面で男が男を呪つたものか、女が男を呪つたものか。後世に丑の刻参りとして伝えられている人呪いの最も古い例が、宮廷の古井戸の中から出て来たので千百四五十年の昔、すでに人形をつかつての呪咀が行われたものと考へられているのである。

これら各種人形の製作には顔の表情は最も大切であるだけにその製作には種々の工夫が加えられ当時の世相を反映して時代の嗜好を自然に作り出している。円面、長形、卵形、瘦肥等その変化は鑑賞者の興味を唆るに充分である、その表現も象徴的表現より写実味を加えた作法にと移行し、描眼による写実への歩みから、技工の進歩は、玉眼応用の作法へと、その工程を進めて今日に及んでいる。

この首の部分が現今埼玉県で多く作られて居る。岩槻の地には往時日光造営の爲の諸国の工匠達が集り日光造営終了後もこの地に定住して造り出したのが初まりと言われる。三百年に亘る伝統を有し、岩槻町に近い粕壁に人形材料の桐粉が大量に出るのに便宜を得て、特産地として歌舞伎人形、舞踊人形を始め京人形の頭など、その大半が埼玉県に於て生産されている。この首の部分の製作に刷毛が使われる。この刷毛が人形刷毛と呼ばれるもので、明治末期迄は、かなり量も多く作られて、各地方へ送られて居つたものである。

これらは大量的な人形生産であるが、このほか美術工芸的な現代人形の個人製作品を胡粉塗によつて仕上げるものが多くある。人形刷毛は普通二寸、一寸八分、一寸五分、一寸とあり、柄の長さ七寸で極上質の熊毛を用い、うすめに作るのであるが、人形塗りには時に際どい毛先の必要があるので、毛先の仕上げを鹿角菜よのめで固め、毛先の薄くなる様に癖をつけ、三味線糸で綴ぢるのが通例である。巻藁にさすのに便利にするため柄の先を尖らせて作る事もある。